

新刊紹介

過去約2年間に発行された書籍の中から時事的で話題性があり内容豊かなものを会員のご要望に応えながら編集委員会が選択して紹介いたします。

『近江商人と出世払い —出世証文を読み解く』

宇佐美英機 著 | 吉川弘文館、2021年、275pp.

誰もが「出世払い」という言葉を見聞きしたり、自ら用いたりしたことがある。だが、将来出世した時に弁済することを約束した借用証書である「出世証文」は、主に上方地域、とりわけ近江に本宅を置き全国各地に出店を展開した近江商人の創業家などにその多くが残されている。

本書は、本学の名誉教授である著者が、近江商人の出世証文を紹介しながら丹念に読み解いたものである。そこから、出世払いの慣行の実態とともに、そうした慣行を生み出した近江商人や近江国の立身・出世観が次第に浮かび上がってくることに本書の醍醐味がある。

借金や商品代金の支払い滞りにより家計・経営の破綻状態に陥った債務者が、精を出して家計・経営の立て直し(=出世)をして弁済することを約束し、以降は催促なしの無利子となるといった出世払いの慣行は、前途有望な若者への奨学金のようなイメージとともに、近代以降の立身出世の語感をも裏切るものであろう。著者は、本宅近在の子供から採用した奉公人が、職務を順等に昇進する「立身」の先に、別家を構え経営者となる「出世」の道を目指した自助努力を求められる一方、その立身と出世を導くことを店主の責務とした近江商人の店法類に目を向ける。厳しい精進により商業技術や倫理を習得し、家業を起こして相続させていくという立身・出世観の共有が、奉公人の不祥事の処理のみならず、商人間の復興支援等にどう関わっていったのか、興味は尽きない。

(評／『彦根論叢』編集委員／田中英明)

『サラ金の歴史—消費者金融と日本社会』

小島庸平 著 | 中央公論新社、2021年、344pp.

本書もまた債務に関わる歴史が描かれている。アコム、プロミス、レイク、武富士、アイフル…。どのサラ金企業の名前やコマーシャルが真っ先に頭に浮かぶかで、もしかしたら年齢が分かるかもしれない。それくらい、各社の創業者たちが革新してきた技術や手法は互いに異なり、経済変動や規制の影響もあいまって激しい盛衰を繰り返してきたことに驚かされる。

事業や企業への融資ではなく、消費者に無担保で金を貸すことには高いリスクがあり、安定した元利返済を得るビジネスとして成り立たせることは容易ではない。貧困者を融資の対象とする「金融包摂」の成功事例として注目を集めるグラミン銀行も、事業用資金の融資を原則としている。それだけにサラ金は、公的扶助の不十分な日本において低所得者の窮状を救う「セーフティネット」として頼られる一方で、深刻な多重債務と苛烈な取立ての果てに様々な悲劇を生んできた。

サラ金を成立させた信用審査や債権回収等に関わる金融技術の核心が、「団地マダム」から「上場企業の社員の遊興費=出世のための健全資金」、「進学のための学生ローン」へ、そして「主婦による生活費の穴埋め」、さらに「自動契約(受付)機」へと変遷したことは、接待や部下との飲みニケーションに励むモーレッツ社員などの労働や生活のあり方、家族やジェンダー意識の変容と深く結びついている。債権・債務関係にはやはりその社会の人間関係の特質が現れるのである。

(評／『彦根論叢』編集委員／田中英明)

